

作品名	かえって来て、 ねこ先生	氏名	-----
©言問学舎			

## ★この教材サンプルの使い方

- ・この教材サンプル『かえって来て、ねこ先生』には、本文のほか、左側に例示してある読解のためのシートと、原稿用紙の原紙サンプルがついています。
- ・できるだけ、**本文は音読して読むように**して下さい。
- ・その上で、読解のためのシートに、お子さんの**率直な感想**を書かせて下さい。
- ・ご家族の方が一緒に**相談したり、意見を聞いて上げたり**してかまいません。
- ・**「正解」はありません**。シートに書きこんだ内容をもとに、原稿用紙を使って感想文を書いて下さい。あらずじは書かなくていいです。「私（ぼく）はこの物語を読んで、・・・・・・のように思いました。」と進めて下さい。

① 一番おもしろかったのはどこですか。（〴〵のところ。）	↑
② 意味のわからなかった部分を書きましょう。（〴〵のところ。）	↓
③ 主人公（ねこ先生か、みけさん）のどんなところが好きですか。	↓
④ みけさんは、なぜだんだん弱々しくなったと思いますか。	↓
⑤ ねこ先生は、なぜすぐにねこ医院に帰って来ないで、おみやげをたくさん集めて来たのだと思いますか。	↓
⑥ 最後のところで「先生」になったみけさんがここにこしながらポンポンちりょうをしています。どう思いましたか。	↓
⑦ 感じたことを、かじょう書きにしてみました。	↓

読解のためのシート 見本(PDFの中に入っています)

- ・原稿用紙は200字詰めです。初めは3～4枚程度書ければ十分です。
- ・一般的な原稿用紙の使い方の決まりを守って下さい。
- ・添削をご希望の方は、メール・電話・郵送等にて、言問学舎 小田原までご連絡下さい。





## かえって来て、ねこ先生

小田原漂情

むかし。そう、ねこの世界の時間で三百ニアーほど前のことです。ニアーとは、ねこたちの一年をあらわすことばで、にんげんの一年とくらべると、だいぶみじかいものでした。そうですね。一ニアーをにんげんの時間になおすとしたら、二か月くらいになるのでしょうか。

そのころねこの世界では、国どうしのあらそいがつづいていました。ねこ先生のすむマター国は、六十二ア一ほどせんそうのなかったへいわな国でしたが、ねこの世界の大きなみんぞくあらそいにまきこまれ、王さまのしんせきの、とおいツグラ一国へ、おうえんのへいたいをださなければならなくなっていたのです。

これはそんな時代の、マター国の名医ねこ先生と、先生をしんらいしてささえつづけた、かんどふのみけのおはなしです。

「ねこ先生、きょうのかんじゃさんはいまのぶちさんでおしまいです。」

みけはいつものように西の谷のねこ医院のいりぐちをしめてかぎをかけると、しんさつしつにもどってねこ先生に言いました。

「ああ、ごくろうさん。」

いつもなら、ねこ先生のやさしいへんじがあるはずですが、でもきょうは、なぜかしらそのこえがきこえません。

「ねこ先生？」

みけがついたてのかげからねこ先生のつくえのほうをのぞいてみると、ねこ先生は白衣もまだぬがす、じつとうでぐみをしてかながえこんでいます。

「……あんなねこ先生のよこがお、はじめて見るわ。何かあったのかしら……。」みけはしんぱいになって、ねこ先生を見つめていました。するとそのけはいにきづいたのでしょう。ねこ先生は回転いすにすわったまま、くるりと向きをかえ、みけをよびました。 「みけさん。ちょっとはなしがある。」

ねこ先生のまなざしは、いつになくしんけんです。みけはおずおずと、ふだんかんじゃのねこたちがそうするように、ねこ先生のまえにすわりました。

「じつはな、みけさん。わしはこんど、王さまがおおくりになるへいたいといっしょに、ツグラ一国へいかなければならなくなった。」

「えっ！」

それはみけがこのところ、ずっとおそれていたことです。マーター国のオスねこたちは、ツグラ一国へのおうえんのために、さいきんつぎつぎとよびだしをうけていました。でもねこ先生はお医者さんだし、きっとそんなことにはならないと、みけはかたく信じていたのです。いいえ。むりにでも、そう信じたかったのかもしれませんがね。

「でも、でもねこ先生。先生はお医者さんだし、ぜったいにけんかやせんそうをしない、へいわしゅぎの方じゃありませんか。むかしこの国がたちなおるとき、ねこけんぼう（マーターけんぼうともいいます）をつくるのに参加したのがじまんだって、いつもおっしゃってて……。それなのに、なぜ？」

そう、ねこ先生は、マーター一国がねこの世界でもめずらしい、王さまを中心としたへいわてきなみんしゅしゅぎをじつげんした、マーターけんぼういいんかいのいいんです。

ねこ先生はわかいころ、マーター一国の自立のために力いっぱいはたらいた、そのことがなによりのじまんだったのです。三十二ア一ほども年のちがうみけは、ねこ先生がしんさつあとのぼんしゃく（しごとのあと、夕ごはんのときにおさけをのむこと）でごきげんになると、いつもそのはなしをきかされていました。

「うむ、わしもこんどばかりは、ほんとうにこまったよ。だがこれは、王さまからのちよくせつのためのみでな。もちろんわしは、たたかうわけじゃあない。へいたいどうしがたたかえば、かならずけがをするものがあるじやろう。みかたも、てきも、それからじっさいはたたかいくわわらない、メスねこや子ねこたちの中にもな。ツグラ一国でのせんそうがさけられないじょう、そこでけがをするであろうねこたちを、すこしでもすくうために、医りようチームのリーダーとして行ってほしいというのが、王さまのためのみなんじゃよ。まあ、わしがねこ神拳のめいじんで、じぶんをまもれるはずだということも、とうぜんかんがえてのことだろうがの。」

ねこ先生は、ふふっ、とわらいました。でもみけは、気が気でなりません。

「でもねこ先生、いくら先生が拳のめいじんだって、おおぜいのてきにいっぺんにおそわれたら、どうするんですか。わたし、こわいです。しんばいです。」

「ふむ、たしかに、いざせんじょうにはいってしまえば、わしひとり高見の見物（ひとりでおくから見ていること）をしているわけには、いかんかもしれん。なんといってもせんじょうでは、なにがおこるかかわらんからの。それはかくごしておる。それにわしらがつくったねこけんぼうのことも、気にならんわけではない。」

みけはこのときとばかり、ことばに力をこめました。

「そうですよ、ねこ先生。ツグラ一国へのおうえんたいの医りようチームといっても、先生がせんそうにいくなんて、若いねこたちのためにもなりませんわ。どうかもういちど、かんがえなおしてみてください。」

みけはひっしでした。けれどもねこ先生は、じっとみけの目を見つめながら言います。

「しかしな、みけさん。オスねこには、ここでじぶんがたちあがらなければならない、というときが、一どか二ど、かならずあるものなんじゃ。わしにはこれが、二どめなんじゃよ。」

みけをみつめるねこ先生のひとみのおくに、ふかいかなしみの光がやどっていました。

「もちろん、わしも行くときめたいじょう、できるかぎりのことはした。マーター一国のねこすべてが、心から

ツグラ一國へのおうえんにさんせいできるよう、王みずからがきちんとみんなにせつめいすること。それから、たたかいで傷ついてかえってきたねこたちのことは、かならず王のせきにんでめんどろをみること。このふたつを、王にやくそくさせたんじゃ。どうかな、みけさん。若いねこたちへのせきにんは、わしなりにしたしたと思うがの。」

「それはそうですけど・・・。」

みけはこころの中で、なきさけんでいました。それは王さまのため、ツグラ一國のため、みんなのためには、ねこ先生はりっぱにせきにんをはたすのかもしれない。でもみけは、みけはどうなるの。親子ぐらい年もちがうし、やとわれたかんどふでしかないけれど、でもみけは、ずっと、ずっとねこ先生のことをすきだったのに・・・。先生はみけのことなんかなんとも思わずに、せんそうにってしまうのかしら。

みけはおおきな目に、なみだをいっぱいためていました。でもふときがつくと、ねこ先生の目にも、うっすらとなみだがにじんているようです。

「わしだって、みけさん、きみのことだけが気がかりなんじゃ。としごろのきみを、ずっとこのねこ医院のためにひきとめてしまったしの。だがなみけさん。きみはまだ若い。わしにもしものことがあったら、はやく若いりっぱなオスをみつけて、しあわせになっておくれ。じゃがでできるものならば、わしがかえってくるまでのあいだ、このねこ医院をまもっていてくれんじやろうか。きみはもうじゅうぶんに、わしのだいりとしてポンポンちりょう（ねこのあしのうらの肉球でマッサージをする、ねこ先生どくとくのちりょうほう）ができるはずだ。わしのかわりに、このマーター一國のねこたちのからだを、まもってやってほしいのじゃ。」

ねこ先生は、ふかぶかとみけにあたまをさげました。「わたしもおとします」ということばが、みけののどのおくまででかかっていたが、ながいことねこ先生のそばではたらいっているうちに、みけにはねこ先生のところが、すっかりわかるようになっていました。先生はみけを信じていてくれる。みけのことをいちばん気にかけていてくれる・・・。やがてみけは、しずかにねこ先生に言うのでした。

「わかりました。わたしにできるだけのことをして、このねこ医院をまもりながら、おかえりを待っています。・・・でもねこ先生？ひとつだけ、みけにごほうびをくださるって、やくそくしてください。」

ねこ先生は、いつものやさしいほほえみをうかべながらみけにこたえます。

「なんだい。どんなことでも、言ってごらん。」

「きっと、きっとげんきでかえってきてください。そしておかえりになったときは、みけを、みけを先生のおよめさんにしてください。」

ねこ先生とみけは、だまってみつめあいました。ねこ紀元二千ニアーまであとすこしの、春のひと夜のことがあったといいます。

それからしばらくすると、西の谷のねこ医院のちかくでは、夜ごとにみけの泣くこえがきかれました。

「ねこ先生かえってきて。ねこ先生かえってきて。」

昼間は気丈にしんさつをするみけも、やはりねこです。夜になるとさびしさに勝てなかったのでしょうか。じじょうをしているきんじょうのおじいさんねこ、おばあさんねこたちは、みけのことをあわれみました。

ツグラ一国でのせんそうは、ねこしじょうまれにみるだいせんそうになってしまい、マーター国の王みずからが、さらにおうえんのへいをつれてかけつけるほどでした。ねこ先生はせんじょうで、やすむまもなくけがをしたねこたちのであてにはしりまわります。そのすがたはまるでねこぼとけさまのようだったと、あるへいたいがかえってきて、マーター国のみんなにつたえました。

そして三ニアーがすぎ、ツグラ一国のだいせんそうが、ようやくおわりをつげたころ。みけはかえってきたへいたいたちのしょうどくやてあてにおわれながら、ねこ先生のかえりをまちつづけていました。けれども王さまがかえり、まいにちおおくのへいたいたちがかえってきて、ねこ先生はかえってきません。

「ねこ先生かえってきて。ねこ先生かえってきて。」

みけのむねははりさけそうでした。あんなにかえりをまっていたのに。かえってきたへいたいたちのだけれも、ねこ先生のすがたをみていないということです。

「ねこ先生かえってきて。ねこ先生かえってきて。」

おなじことばをくりかえしながら泣いていても、その声のだんだん弱々しくなっていくのが、西の谷のねこたちには、よくわかりました。このままではねこ先生もかえってこないし、みけまでもがどうなってしまうかわからない。だれもがなんとかしなければ、と思いました。みけはいまでは何かにとりつかれたように、ひるのあいだは死にものぐるいでポンポンちりょうをつづけています。

長老ねこは、王さまのところへいくことを決心しました。まだこの時代でも、直訴（国のけん力者に直接訴えること）は重いつみになりますから、長老はみけのために自分のいのちをなげだすかくごだったのです。すると、そのとき。

西の谷への入り口の、灰かぶりとうげのあたりから、さわやかなかぜが吹いてきました。みんながとうげの方を見上げると、そこにはおみやげをたくさんかかえたねこ先生が、日焼けした顔をほころばせて、立っていたのです。

ねこ先生と再会したときのみけのよろこびようを、そうぞうしてみてください。まわりのねこたちは、そのあまりのけなげさに、みんなもらい泣きしたといいます。ねこ先生は、やさしくみけの肩をだいて、それまでの苦労をねぎらうのでした。

それから、ふたりはどうしたか、って？

マーター国の灰かぶりとうげを地図でさがして、そこからそっと、西の谷をのぞいてごらんささい。いまでもそ

ここでは、ポンポンちりょうの音がきこえています。たくさん子どもやまごにかこまれながら、すこしおじいさんになったねこ先生と、ベテランの名医としたわれるみけ先生がにこにこして、ねこのかんじゃたちをなおしているはずです。

おわり